

第五回 作業小屋からずっと(一)

土地を購入したのが十一月の末だったので、冬の間は野遊びをおあずけにして、春になったらどう楽しもうか妄想に浸ることにした。

今までのように友人に甘えてゲストハウスを都度貸していただくのは気がひけるので、ちよつとした作業小屋を建てようということになった。幸いにしてここは市街化調整区域の指定がされるまえに住宅用に建物が建てられていたので、住宅が建てられる土地なのだ。

まず、作業小屋は土間がいいねということになった。

当然、手を洗ったりする水は必要だし、

お茶を入れる程度のお湯は沸かせた方がよい。

トイレもいちいち隣に借りに行くのも悪いし

六十メートル離れているのも不安なので必要だよね。

毎回、日帰りも慌ただしいので

泊まれるように簡単なベッドも会った方がよいね。

外作業をして汗をかいたまま寝るのはどうかな

シャワーぐらい浴びられるようにしたいな。

泊まった時の食事はどうする?。

こうなってしまうたら考えは後戻りできなくなり、急なメールがきたり、資料をつくらなければならなくなった時のために、小さくても良いから仕事スペースが欲しいとか、やれ冷蔵庫はあった方が便利だとか。

自然に囲まれて野遊びを楽しめる小さな作業小屋というイメージはどこかに消えてしまつて、気がつくともちなか暮らしの便利さをそのままコピー&ペーストしたような立派に「家」になつてしまった。それに、いなが暮らしの本に出て来そうな薪ストーブ、それもオープン付きのが良いなどと、料理をつくりもしない私が言い出す始末。

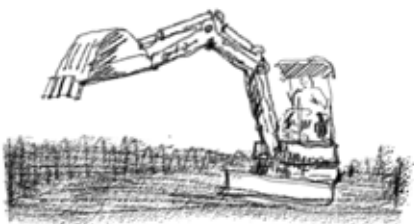
妻は、しきりに「こんな湿地に家を建てるなんて身体を壊すのじゃないか。」と心配したが、「週末に立ち寄るだけだから」と説得した。

それでも、なんでも一人大工の知り合いに土地をみてもらつたら「まず、中古のユニボを買いなさい。そしてできるだけ多く暗渠排水を入れなさい、それからだね。」とのアドバイス。野遊びをするにしても、それだけ手強い土地だということだ。妻は、私が「ユニボ」のところで目がキラッと光ったのを見逃さず「そんなもの買って、いったいどこに置いておくの。」と釘をさされた。ただ、頭の中ではユニボなる小型重機を自在にあやつりながら溝を掘り、暗渠排水を埋めて行く自分が見えていたのである。

なんせ、土地は千五百坪あるので、どんなに建物が大きくなっても敷地に収まらないということはないし、建物も自分が良ければいいので徹底的にローコストでいけばなんとかなる。

と、思っていた。

それが大きな間違えであることに気づくのにそう時間はかからなかった。



妻は長年自分で建築設計事務所をやっていたので、私が考えていることに無理があると薄々気づいていたと思うのだが、ここで水を差してはかわいそうと思ったのか、成り行きを見守る姿勢でいてくれた。

それでも、市街化調整区域がこの土地には住宅を建てる事ができるといふ証明書をもらうにあたっていろいろ調べてくれた妻の顔つきが険しくなってきた。

ここに住宅を建てた人は、千五百坪のうち百坪を建築敷地として建てたので、新築することはできるがその敷地はその百坪の範囲に限られるというのだ。千五百坪のどこに建てようかといういろいろ妄想していたのが一挙に現実引き戻された。

さらに悪いことに、その敷地は公道に面していなかったのだ。道のように見えるが細長い私有地で、それもたくさんの方の共同名義になっているというのだ。その私有地は「みなし道路」とされていて、建物を建てる際に敷地は道路に接していなければならぬという条件には適合するのだが、公道ではないのでそこを通行して良いかどうかは土地所有者の同意をもらわなければならないというのだ。そこが使えないとなると公道に面したところからその敷地まで自分で道をつくらなければならない。一大事である。

幸い私有地を所有されている方はみなさん親族で、窓口になっていた方が工事やその後の通行に使ってかまわないと言っていたので事なきを得た。ただ、工事用道路として使うには重量車両に耐えられないこともわかり、こちらで二百メートル分の道路の舗装工事をしなければならなくなった。

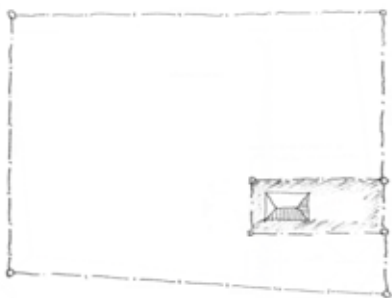
さらに地盤の調査をしたら、杭を打たなければならぬ状態だそう。作業小屋と思っていたのが、杭を何本も打つ豪邸のような建物になってしまった。木造のほとんど平屋の建物なのに。

さらにこれはすでにわかっていたことだが、その廃屋には上下水道も電気も来ていない。水道の本管までこれも二百メートル自分で管を埋めなければならない。下水はちゃんと浄化槽を通した水でなければ川に流すことができない。電気は公道までは電柱を建ててくれるのだが、そこから敷地まで距離があるので敷地内に自分で電柱をたてなければならぬとのこと。

後々、建築の計画が固まって工事費の見積もりをとったら、建物本体はローコストで頑張っても、目に見えないところに思わぬお金がかかることがわかった。妻曰く、「この目に見えないところの工事費で、ベンツが買えたね。」

とりあえずその年は、雪のなかにぼつんと建っている廃屋の写真を撮ることにした。廃屋はその冬の雪で潰れてしまってもおかしくなくらいの状態だったので、確かにそこに住宅が建っていたという証拠写真を残しておかなければ、市街化調整区域で建物を建てることもできなくなる可能性があったのだ。

そして正月休みは、ちよっと夢がしばんだが、いろいろアイデアを出し合い妻が図面を引き、私は模型をつくることに費やした。



第七回 作業小屋からずっと(三)

プランを考えるのは楽しかった。

なかでも敷地にどのように建物を配置するかは結構考えた。土地は東西を対角線にしたほぼ正方形。その東隅に近いところに建物を建てられる敷地がある。その場所から土地の木立をもっとも広く見渡せるように北西に面して南北に長い建物にしてみた。北や西に面して窓を大きく取るのは住まいとしてどうかとも思うが、そのことによって太陽の光をいっぱい受けた木立を見ることができるとだ。建物の向きを決めたもうひとつの理由は、小さな二階の作業部屋からE岳を真正面に見えるようにしたかった。航空写真などを手がかりに窓が面する角度を割り出したりした。建ってみるとびつたりの角度だったのだが、山を見る視線のちょうど途中に常緑のトドマツの太木があり山を隠してしまうことがわかった。計画的配置といっても、私の場合はその程度ということか。

建物のプランもいろいろ考えてなかなか決まらなかったが、その都度、家具付きのドールハウスのような模型をつくって検討した。家具はテーブルや椅子はもとより、私にとつては重要な薪ストーブと煙突まで細々とつくってしまったのだ。その時間が楽しかったのは言うまでもない。

最終的にほぼワンルームのコンパクトな平家にとちよんと二階が乗ったかたちに収まったが、結局、作業小屋からずっと住めそうな家になってしまった。建築費もまっとうな額になってしまったのは言うまでもない。老後は便利なまちなかのマンションにと思つての蓄えを全て放出してしまったのは、今から考えると大胆な決断だったのだが、何かに憑かれたかのように工事契約書に判を押してしまった。それがどのような意味を持っていたのかを気づくには少し時間がかかるのだが。

なんだかんだあつたが、雪解けと同時に工事が始まった。

工事で重要なのは敷地の排水だった。以前住んでいた方も排水には苦労していたようで家の近くに素掘りの溝が川につながる側溝まで引かれていたが、それが役に立っていた感じはまったくなかった。よく敷地を調べると、それとは別に敷地側に立派な側溝跡が見つかった。跡と書いたのは、長い間放置されたことで、すっかり土砂に埋まって水路の役割を果たしていなかったようだ。その側溝は隣の敷地の側溝とつながっているのだが、高低差が三メートルほどあるので隣から流れ落ちた水が私たちの敷地に広がってしまったのだ。

工事をしてくれた人の話では「土砂がまるで扇状地のように広がっていたよ。」とのこと。その例えで言えば、家を建てようとしたところは扇端から先の低湿地になる。妙に納得。

側溝はもとの材料を生かして見事に復元され、ずっとそこにあつたように風景に馴染み、流れる水も綺麗だった。でも急に敷地の水が引くわけではなかった。建物の工事が始まった時に見に行ったら、建てる場所を示す目印杭が水浸しの泥のなかにぼつんとあつたのは、今でも鮮明に覚えている。でも、ここまで来れば先に進むしかなかった。

